

長野県松本市

KITAOKOSHI

北起し遺跡

—発掘調査報告書—



2008. 3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、松本市大字寿小赤 817 他において、平成 18 年 4 月 14 日から平成 18 年 5 月 31 日にかけて行われた北起し遺跡（きたおこしいせき）第 1 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、宅地分譲事業に先立ち、開発事業者の長野県労働者住宅生活協同組合と松本市が発掘委託契約を締結し、それに基づいて松本市教育委員会が行った緊急発掘調査である。
- 3 本書の執筆は、I : 事務局、II - 1 : 森 義直、III - 3 - (1) - ア : 直井雅尚、III - 3 - (2) : 関沢 聰、III - 3 - (3) : 内田陽一郎、その他三村竜一が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄：白瀬二三子

鉄器実測・トレース：荒井留美子

遺物保存処理・復元：中村恵子 洞沢文江

版組：八板千佳 内田陽一郎 横井 奏

遺構図整理：岡崎武祥 横井 奏

写真撮影（遺構）：岡崎武祥 横井 奏

土器実測：竹内直美 八板千佳 白鳥文彦

（遺物）：宮崎洋一

石器・石製品実測・トレース：内田陽一郎

表作成：岡崎武祥 内田陽一郎 関沢 聰 吉井 理

- 5 石器・石製品の材質鑑定は森義直氏、墨書き器の判読は瀬川長廣氏にご教示を得た。

- 6 本書の中を使用した遺構名の呼称は次の通りである。

第●号住居址 → ●住 第●号土坑 → ●土 第●号溝状遺構 → ●溝 第●号ピット → P ●

- 7 本調査で得られた遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL : 0263-86-4710 Fax : 0263-86-9189）に収蔵されている。



1. 平田本郷 2. 竹淵 3. 向原 4. 小原 5. 高瀬 6. 寿南久保 7. 百瀬 8. 百瀬南 9. 白川 10. 野田 11. 白姫 12. 坪之内
13. 塙原の牧跡 14. 小屋 15. 村井 16. 北起し 17. 小池跡 18. 小池 19. 一つ家 20. 新田山道 21. 松山 22. エリ穴
23. 糸遊堂 24. 中山古墳群 ※一部遺跡名を省略

第1図 遺跡の立地と周辺遺跡

Ⅰ 調査の経緯

1 調査に至る経緯

北起し遺跡は松本市街地の南、寿地区に位置する新発見の遺跡である。

平成 18 年、長野県労働者住宅生活協同組合による宅地造成が計画され、造成地が遺跡の近接地にあたるため、埋蔵文化財が破壊される可能性が生じた。よって試掘確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認することになった。試掘確認調査は平成 18 年 3 月 22 日、建設用重機によって申請地内に 3 本のトレチを設定して行った。その結果、30 ~ 70cm 挖り下げたところで土器片が多数出土し、土坑等の遺構が検出された。このため、事業者と埋蔵文化財の保護について協議を行い、宅地造成事業に先立ち、遺跡の破壊がさけられない開発道路予定地の発掘調査を実施して記録保存を図るものとした。

平成 18 年 4 月 3 日付で事業主である長野県労働者住宅生活協同組合と松本市が委託契約を締結し、松本市教育委員会が発掘調査を行った。同教育委員会では次節のような発掘調査団を組織して同年 4 月 14 日から 5 月 31 日まで現地における調査を実施し、調査終了後は室内における整理作業及び本報告書の作成を行って、平成 19 年度、本報告書を刊行するに至った。

2 調査体制

調査団長 伊藤 光（松本市教育長）

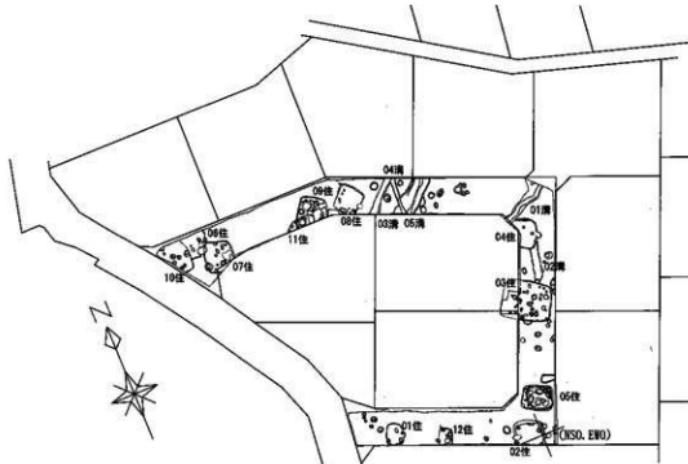
調査担当 三村竜一（文化財課主任）、岡崎武祥（同嘱託）、横井 奏（同嘱託）

調査員 今村 克、三村 肇、森 義直

協力者 荒木 稔、石井脩二、翁像 薫、勝川順一、河野清司、下条ちか子、中村恵子、中山自子、福島 勝、古屋美江、百瀬 寛、百瀬二三子、三代沢二三恵、三代沢宗俊

事務局 松本市教育委員会文化財課

宮島吉秀（課長）、横山泰基（係長）、直井雅尚（主査）、関沢 聰（主査）、花村かほり（嘱託）



第2図 調査範囲

II 遺跡の位置と環境

1 地形・地質

(1) 北起し遺跡の位置と環境

本遺跡は、松本市の南東部寿地区にあり、先年発掘した小池遺跡と百瀬跡のほぼ中間に位置し、田川右岸段丘堆積物に、東部の筑摩山地から流下する牛伏寺川（牛伏川）の扇状地堆積物が載りその扇端近くにある。標高はほぼ 640m で西側に 37/1000 の傾斜をなし、漸次緩やかになり田川の右岸まで続いている。本遺跡は田川へ西へ約 600 m、中山丘陵の麓を流れる牛伏寺川へは東北東に約 1200 m、中山丘陵へは東北東へ 2 km 程で達し、そこから更に 1 km 程で筑摩山地となる。西側は田川・奈良井川・頤川・そして梓川を越え 12km 程で飛騨山地の山麓線に至る。

(2) 地形・地質

発掘地点の松本盆地南東部の基盤をなす主な堆積物は、奈良井川系の中古生層からの砂礫層であるが、この奈良井川による広大な扇状地には 3 段の河岸段丘が形成されている。この松本盆地の南から北に広がる奈良井川扇状地の東端を、南から北に切って流れるのが出川である。田川は塙尻下西条付近から盆地に入り、北流して松本市街の西部で奈良井川と合流している。その途中で東部の筑摩山地から流入する牛伏寺川を始め多くの小河川を合わせている。この諸河川の中で一番大きな扇状地を形成しているのが、本調査地点に直接関係のある牛伏寺川である。この牛伏寺川は出水率（年間の最大流量と最少流量の比率）が極めて大で土砂の堆積が異常に多く、そのため天井川になり易いことで昔から有名である。この牛伏寺川は筑摩山地の横峯付近に源を発して西流し、片丘の六道付近で谷を出て流路の首振りにより扇状地を形成している。歴史的には真西の寿地区に流れているあとがはっきり残っているが、現在は扇状地の東端まで流路は首を振っており、六道付近から北に大きく曲がり中山丘陵の西麓を洗って北上し、下瀬黒付近で屈曲して出川と合流している。牛伏寺川上流の鉢伏山地の地層は新生代第 3 紀にフォッサマグナの海に堆積した礫・砂・泥・火山灰などの堆積岩と、これに貫入した石英閃緑岩、石英斑岩、ヒン岩などの火成岩類であるが、この地帯は N-S 方向の活断層帯により地盤の破壊が進み、崩壊した多量の土石が下流に押し出されて谷を埋め、下流では流路の移動（首振り）が激しく、しかも天井川化している。このように出水率が大でしかも発破壊帯を横切り堆積が激しいため標高 700 m 付近では 60/1000、白姫付近では 50/1000 ~ 25/1000 に変化し、本遺跡付近では 37/1000 と傾斜の変化も度重なる洪水の向きにより大きく変化している。江戸時代には扇頂付近での決済により、真すぐ西に向かって流下し、田川へ流れ込み大きな被害を出している。決済は牛伏寺川の左岸が殆どで右岸は 3 回程である。

(3) 本遺跡の特徴

上述した如く土石の押し出しが極めて激しい扇状地であるのに、住居跡は弥生～奈良～平安とほぼ同じ面に存在していることである。このような例は旧女鳥羽川左岸にも見られる。今回発掘した住居跡面の傾斜は西へ 37/1000 であり、地表付近もそれに近い値である。この値は大きな洪水の直撃を受けない限り、雨水や小流程度では 37/1000 という傾斜地では〔流出する土砂の量 = 流入する土砂の量〕という関係が成立つことを示している。この結果土層断面図をみると特に注意すべきは地層累重の法則は必ずしも成り立たないということであり、傾斜地での土層は上流の新しい土層が入れ替わって下に堆積する可能性もあるということである。堆積物については土層柱状図を参照されたい。



第3図 土層概念図

2 歴史的環境

本遺跡のある松本市寿周辺には、多数の遺跡が分布している。北西流する牛伏川、塩沢川、舟沢川等が形成した扇状地、北流する田川によって形成された段丘上に繩文時代～中世の集落が展開している。

ここでは、本遺跡周辺の弥生時代・古代の発掘調査について簡単に触れてみたい。(第1図参照)

1 弥生時代 弥生時代中期～後期にかけて百瀬式の標式遺跡として著名な百瀬(住居址27)、後期の竹淵(同12)などで調査が実施されている。集落は扇状地末端の低湿地と河岸段丘上に展開している。

2 奈良・平安時代 本遺跡の周辺一帯は古代の吉田郷にあたり、東山道が通っていたと考えられている。本遺跡の南に近接する小池・一ツ家(住居址229)では、大規模な調査が実施されている。北には百瀬南(同2)が近接する。田川左岸には、小原(同143)、平田本郷(同195)、塩尻市吉田川西など大規模な集落がある。周辺一帯の遺跡は埴原牧の経営などに関わりのある集落と推定されており、注目されている。

III 調査結果

1 調査の概要

調査範囲 造成地内で、掘削により遺構が破壊される巾5m、長さ100mの「コ」の字形の道路部分を対象地として本調査を行った。調査面積は520m²である。

遺構検出面の設定 建設用重機を用いて耕作土と黄褐色砂礫層(牛伏川氾濫による堆積)、黒褐色土の一部を除去し、現地表面下約20～90cmの灰黃褐色土層と2次堆積ローム層中に1面の遺構検出面を設定した。

測量方法 平面測量は、簡易造り方測量で行った。国土地理院の旧平面直角座標第VII系X=19446.000、Y=-46905.000に、原点(EW 0・NS 0)を設定し、そこから2mのメッシュを組み、各交点に釘を打ち基準点とした。標高については、3箇所に木杭の基準点を設定した。

検出遺構 竪穴住居址12軒(弥生1・古代11)、土坑34基、ピット15基、溝5基(弥生時代以前1・古代3・近代1)を確認し、繩文～中世の遺物を得た。近・現代の耕作に伴う畝合等の遺構は、期間の制約などから、一部を除き、対象外とした。

2 遺構

(1) 竪穴住居址(第5～7図、第1表)

ア 弥生時代

第03号住居址(第5図) 位置 調査区東側中央に位置し、北西・南西隅部は、調査区外になる。西壁は調査区端と重なる。検出状況 検出面は、現地表面下20～45cmと比較的浅い。耕作による擾乱を部分的に受け、巾30cmほどの畝合が数箇所認められた。検出当初から炭化物の小破片が散発的にみられ、焼失家屋ではないかと考えられた。切り合い 13土・33土を切る。床面 全面は確認できなかったが、床面の状況は場所によって異なり、中央部～東壁側は貼床がされ、非常に堅固な状態で、他に比べ若干浅い。西壁側は貼床がなく、固さはない。全体的には細かな凹凸があるものの、大きな傾斜は認められない。住居建設時には、2次堆積ロームの明黄褐色土が現れる深さまで地面を掘り床の構築面としている。壁の状況から、建設の際には壁際部分を除いて、礫を除去して整地したと推定される。ピット 総数30基ある(21Pは欠番)。このうち4つのピット(02P・25P・28P・29P)は、位置・規模等から見て、主柱穴の可能性がある。炉 床面に数箇所の焼土が確認されたが、炉と推定されるものはない。柱穴間では25P・28P間にあるが、

床を掘り込んだ様子は伺えず、焼失時に被熱した可能性もあるため炉址なのかは不明である。遺物出土状況

炭化材・炭化物の残存状況はあまり良くない。床面に接して放射状に分布しているものは、垂木材であろう。土器類の出土量は比較的多いが、床面に接する土器は正位に置かれたような状態で出土した壺（No.16）と横位で潰れて出土した壺（No.13）以外は小破片が多く、一括資料は比較的少ない。鉄族（No.1）は、完掘状況の記録後に床面を掘り抜いて床面下2~3cmで出土した。時期 出土遺物から後期後半と思われる。

イ 奈良～平安時代

第01号住居址（第5図） 位置 調査区南に位置する。全体が5mの調査区巾に収まるため、全体を調査できた。

一帯は畑造成により盛土が行われており、検出面は現地表下70~90cm程と深い。検出状況 検査当初は、畑造成の際の深い搅乱により、大半が床面下まで失われた住居址と考えていた。搅乱部分を除去し、起伏の激しくなった検出面に比較的小規模な住居址のプランを捉えた。搅乱の状況 南側半は搅乱を受け、床面まで10cm程の覆土が残されていた。床面 南東部には礫が露出し、他の部分は、僅かに含まれる程度である。起伏はなく、若干傾斜がある。カマド 東壁中央に位置する壁掘り込みカマドで、残存状況は悪く、碎けた礫が原位置を留めず散乱していた。北側には落ち込みがあり、袖石の抜き取り痕と思われる。ピット カマド南側のピットは、位置・規模等から見て、貯蔵穴の可能性がある。遺物出土状況 床面中央～カマド周辺で土器片が認められた。量的には少ない。時期 出土遺物から9期と思われる。

第02号住居址（第5図） 位置 調査区南東部端に位置し、南側は調査区域外に続く。一帯は現地表面下から検出面まで約20~30cmと比較的浅い。検出状況 耕作による搅乱を受け、南北方向に巾20cmほどの畝合が等間隔に並んでいた。このためサブトレーンチを設定し、プランを推定した。床面 非常に堅固・平坦、覆土との境界は明瞭である。壁面の状況から、壁際を除いて礫を除去し、整地していると推定される。カマド 西壁中央に位置する石芯粘土袖カマドで、残存状況は良い。煙出部分が半円形に突出する。礫を縱方向に使い構築し、袖の南側では2段に積まれた部分が残る。礫の埋め込みは12cm程を測り、両袖手前の礫は、削れた平坦な面を上端に揃えて埋設している。底面は煙道部に向かって浅くなり、横からは階段状に見える。ピット 4基検出された。01P・02Pは、位置・規模等から主柱穴の可能性がある。また、03P・04Pは規模やカマドに近い点で問題があるが、全体の位置から柱穴と考えたい。壁 北壁では緩やかに掘り込まれ、他は弱い傾斜をもつ。遺物出土状況 カマド周辺に土器片、西側中央部の壁下に礫がまとまっている。時期 出土遺物から11期と思われる。

第04号住居址（第6図） 位置 調査区北東部に位置し、西側半は、調査区外となる。検出状況 一帯は現地表面から検出面までは20cm程で、検出面には溝状の畝合が多数残る状態であった。畝合を除去後、サブトレーンチを設定しプランを確定した。切り合い 北西部を01溝に切られ、南側で02溝を切る。床面

平坦で固い。壁直下・カマド周辺等を除いて、黒褐色土と明褐色土の混合土を用いて5~15cmの厚さで貼られていた。壁の状況から、建設の際は礫が混入する明黄褐色土層中まで掘下げ、貼床を行い整地したと推定される。北壁中央部分には、深さ数cm、長さ190cmの周溝が認められ、一部に焼土を伴う。カマド 東壁中央や南よりに位置する壁掘り込みカマド。壁から奥に半円形に掘り込まれた部分は、床面より浅くテラス状になる。手前のカマド底面は床から10cm程深く掘り込まれている。テラス状の部分とカマド底面には焼土とともに多数の土器片が、散乱していた。ピット 1基のみ検出できた。深さは20cm程で、柱痕が認められる。壁 北・西壁は傾斜があり、南・東はほぼ直に掘り込まれている。遺物出土状況 カマド周辺の床面上に多い。時期 出土遺物から1~2期と思われる。

第05号住居址（第6図） 位置 調査区南東部に位置する。5m巾の調査区内に全体を調査できた。検出状況 耕作の畝合が多く残存し、検出面の地山が造構覆土と土質が酷似しており、プランの確定が困難な状況であった。このため畝合を掘り上げた後、畝合の底を抜いてそのままサブトレーンチを利用し、壁の立ち

上がりを確認してプランを推定した。床面 状況から、西側を拡張し、建て替えを行った住居址と推定した。建て替え後は、前の床面上に貼床を設けている。周溝はカマドのある東壁を除き検出され、西の周溝は壁から60cm程内側に離れている。拡張部の床面は若干浅く、全体的には東に傾くものの起伏はない。地山に含まれる礫の除去・整地は南壁下等を除いて行われている。カマド 拡張後のカマドは、東壁中央にある。残存状況は悪い。袖石の抜取痕らしい深さ5cm程の落込みが残り、周囲には数個の被熱した礫が散乱していた。拡張前のカマドの位置は不明である。北壁中央下に焼土を伴う窪みが検出され、カマドの痕跡の可能性もあるが、位置的に疑問が残る。ピット 総数18基認められた。このうち、14P～16Pは貼床の下で検出され、拡張前のピットと考えられる。13P・17Pには柱痕が認められるが、主柱穴は新旧ともに不明である。壁 東壁を除き、ほぼ直に掘り込まれる。遺物出土状況 東側床面上に直径20cm大の礫10個が出土した。土器類は比較的多く、床面中央部と01P・04P・06Pから一括品が出土している。時期 出土遺物から9～10期と思われる。

第06号住居址（第6図）位置 調査区北西部に位置する。北側は調査区外に統くため未検出。切り合い 西側を10住に切られる。一帯は今回の調査区内では西端部にあたり、明治時代の牛伏川氾濫による砂礫の堆積が、現耕作土直下に約20～50cmの厚さで観察された。検出状況 遺構検出面は暗褐～黒褐色土中に設定したが、畝合や不定形の深耕部に堆積する砂礫が多い上に、遺構覆土と地山が酷似し、プランの確定が困難な状況であった。このため畝合の堆積物除去後、サブトレンチを数箇所設定して、06住・07住・10住3軒のプランを推定した。床面 起伏はなく、平坦、堅固。中央部～カマド周辺にかけては、礫を抜き取り、にぶい黄褐色土を埋め込んでいる。他の部分は礫が露出している。カマド 東壁中央にあり、壁を浅く掘り込んでいる。残存状況は悪く、袖石等は検出できなかった。カマド内は住居床面より浅く、断面皿形の窪みには焼土が堆積し、土器片もみられた。ピット 総数4基認められた。何れも掘り込みは10cm程と浅く、断面は皿形を呈す。壁 やや傾く。遺物出土状況 土器類は比較的少ない。カマドの周囲～手前にかけては、覆土下層～床面上に多数の直径10cm大の礫が検出された。時期 出土遺物から6～7期と思われる。

第07号住居址（第7図）切り合い 西側で34土を切り、32土を切られる。検出状況 南東隅部は調査区外になる。床面 住居建設時には、2次堆積ロームの明褐色土上面まで掘り下げ、カマド周辺を除き、壁下までほぼ全面の礫を抜き取り整地している。起伏はなく、平坦・堅固。ピット 9基検出された。09Pは深さ38cmを測り、直径30cmの円礫が床面に上端が露出する状態で出土した。この礫の下面には、直径5～10cm大の礫数個があった。01Pは有段底で、柱痕状の堆積が認められた。床面西側には柱穴は確認できないが、01・09Pは位置からみて主柱穴と考えたい。壁 傾きが認められる。遺物出土状況 土器類を中心比較的多い。覆土中には直径10～30cm大の礫が多数含まれている。床面に接する礫はなく、10cm程離れたものが大半である。時期 出土遺物から5期と思われる。

第08号住居址（第7図）位置 調査区北部に位置する。南東隅部は調査区外になる。検出状況 地表面下30～40cm程の黒褐色土中に灰黄褐色土の落込みとして検出された。サブトレンチを設定し、住居のプランを推定した。南西部は、床面下まで耕作が及んでいた。床面 2次堆積ロームの明黄褐色土を20cm程掘り下げた深さとしている。他の住居址と異なり、中央部～カマド周辺は礫が露出している。礫を抜き取った形跡は認められない。全体的にはやや起伏はあるものの、概ね平坦、堅固である。カマド 東壁中央にある。壁を半円形に掘り込んで構築している。残存状況は悪く、袖は残存しない。カマド中央には、被熱赤変した礫の支脚が縦に埋設されていた。礫は四角柱状を呈し、上端が欠け、平面になる。支脚の上端面～カマド底面は13cmを測る。ピット 総数8基のピットを検出した。西側に住居の軸にあわせて4基が並ぶ。位置的に柱穴の可能性があるが、何れも浅く、柱痕は確認されなかつた。壁 壁は北側でやや傾きを持つが、そ

の他はほぼ直。遺物出土状況 覆土には、床面から離れた状態で礫が少量出土した。土器などの遺物は、カマド内と南東部から出土している。時期 出土遺物から5期と思われる。

第09号住居址（第7図） 位置 調査区北部に位置し、08住の西に隣接している。本址周囲の地山は、2次堆積ローム中に礫を含まない。切り合い 南東部は調査区外、南西部で11住を貼る。検出状況 検出時には、トレンチを2本設定して、床面・壁面を確認しプランを推定した。床面 床面は2次堆積ロームの明黄褐色土を10cm程掘り下げた深さとし、非常に堅くしまり、凹凸はない。中央部～東側には、にぶい黄褐色土で床を貼っている。カマド 東壁北寄りにある。残存状況は悪く、平面が楕円形の窓みに焼土の堆積が認められる。軸は床の中央部に向く。ピット 総数15基と多く、大半が北側で切り合う。床面で確認された穴は本址に伴うものとして扱ったが、11住あるいは単独の土坑・ピットの可能性もある。02Pには柱痕状の堆積が認められる。01P・12Pは何れも直径が1mを超える大形の穴で、灰釉陶器片等が礫と一緒に出土しており、貯蔵穴の可能性がある。15Pは、貼床を剥がして検出したが、柱痕はないものの、規模から柱穴の可能性がある。10Pには、直径20～30cm大的4つの礫が中央を囲むようにあり、柱の存在が推定される。壁 ほぼ直。遺物出土状況 ほぼ全面から出土しているが、砂礫・土器片は、東半部が多く、床面からは10cm程度離れているものが多い。土器片等出土量は、他の住居址に比べ多く、土器類に混じって金属製品も出土している。緑釉陶器の破片が、01P・12P内、カマド南側、北西部から、各1片出土しているが、何れも覆土中からの出土で、床面・底面には接していない。04Pの壁面中程には、土師器挽（No.50）が貼り付いた状態で出土した。白磁碗（No.60）片も出土したが、混入品と考えられる。時期 出土遺物から10期前後と思われる。

第10号住居址（第6図） 位置 調査区西北端に位置し、北壁、西壁は調査区外に続く。切り合い 東側で06住を切る。検出状況 全体の規模、平面形は分らないが、カマド付近は外側に膨らむ。床面 06住とほぼ同じ深さで2次堆積ロームの明黄褐色土を15cm程掘り下げている。中央～カマド周辺は礫を除去しており、平坦、堅固で凹凸はない。他の部分は礫が露出する。カマド 東壁にある。残存状況は良くないが、礫を横方向に埋設した支脚石が残る。両袖には芯材の礫1個が残存する。埋設時の掘り込みは10cmを測る。焼土の検出量は他住居に比べ少ない。ピット 総数7基が検出された。床面で検出した穴は、本址に伴うものとして扱ったが、06住あるいは単独の土坑・ピットの可能性もある。柱痕状の堆積は02P・06Pでみられ、02Pは位置・規模から、主柱穴の可能性がある。壁 ほぼ直。遺物出土状況 西壁中央～南東隅、中央部の床面直上～5cm程上で多くの上器小破片が出土している。また、これらに混じって礫十数個が散発的に認められた。時期 出土遺物から8期と思われる。

第11号住居址（第7図） 位置 調査地北部に位置し、09住に切られる。本址の大半は区域外で、北側一部のみ調査した。検出状況 規模・床面の状況などから住居址と推定したが、平面形がやや不整で、住居址ではない可能性もある。床面 矽の混入しない2次堆積ロームの明黄褐色土を20cm程掘り下げ構築している。平坦で比較的堅固である。09住より5～25cm深い。カマド 調査範囲内では、確認できなかった。ピット 総数5基検出された。柱痕状の堆積は認められないが、01P・04Pは15cm程の掘り込みがあり、柱穴の可能性もある。壁 弱い傾きがある。遺物出土状況 非常に少ない。時期 出土遺物から8期と思われる。

第12号住居址（第7図） 位置 調査区南部に位置し、南側は調査区外に続く。検出状況 西側は烟造成の際に床面下10～25cm程掘削される。ピットなども底面下まで失われた可能性が高い。調査部分の規模・床面の状況などから、住居址と推定した。床面 矶の混入しない2次堆積ロームの明黄褐色土を5cm程掘り下げた面としている。平坦で比較的堅固。北壁下に巾18cm、深さ6cmを測る浅い肩溝の一部が残る。カマド 調査区壁際に、焼土の拭がりと被熱痕が残る礫が認められ、東壁の調査区外にある可能性が高い。

ピット 総数5基検出された。03土は削平された床面下で検出され、単独の土坑として扱ったが、あるいは本址に伴うピットの可能性もある。03P・04Pには、柱痕状の堆積が認められ、位置・規模から主柱穴の可能性がある。**遺物出土状況** 少ないが覆土下層～床面上に直径5～15cm大の礫、土器小破片、金属製品(No.4・6)等が散発的にみられた。**時期** 出土遺物から9期と思われる。

(2) 土坑・ピット(第8図・第2表)

総数は土坑34基、ピット15基である。便宜上、検出時に直径50cm以上の単独の穴を土坑、それ未満のものをピットとして扱った。分布をみると、調査区南部01住西、南東部02住周辺、東部03住周辺、北部05号溝周辺の4箇所にまとまり、群として捉えても良いかもしれない。北西部06住周辺にも2基ある。出土遺物、切り合い等から時期を推定できるものは少ない。以下特徴的、代表的な土坑について、簡単に触れたい。

17土 土層の断面観察時には、柱痕と埋土と思われる堆積が認められた。近接する28土でも、同様の堆積が認められた。周囲には比較的大きく、深さ30cmを超える平面円形の土坑がまとまっている。他の土坑には柱痕状の堆積は認められないものの、調査区外に続く建物址に伴う柱穴の可能性もある。出土遺物が無く、時期は不明。

32土 直径10cm大の十数個の礫と土器器片が壁際を除いて出土した。黒色上器Aの壺A(No.79)、土器甕(No.80)などがある。南東に3m程離れた34土は土器片等の出土は無いものの、底面中央から数個の礫がまとまって出土している。時期は出土遺物から5～6期と思われる。

(3) 溝状遺構(第8図)

調査区北部～北東部で5基検出した。以下時代毎に簡単に述べたい。

ア 弥生時代以前 02溝の1基がある。調査区の地形は北東から南西方向に緩やかに傾斜するが、本址は南北方向に軸を持つ。底面は起伏・傾きはなく、平坦。規模は長さ5.4m、巾は最大112cm、深さは20cmを測る。断面形は台形を呈する。堆積状況から水が流れている様子は何えない。遺物はほとんど出土していないが、03住との新旧関係から、弥生時代後期以前と考えられる。

イ 古代 調査区北部に03～05溝がある。いずれも水を伴う堆積状況は認められない。05溝は地形の傾斜とほぼ同軸方向に伸び、西には03溝が並行している。底面には段があり、最深部は西側に寄る。覆土上層には平面橢円形に礫が集中する部分がある。直径10～15cmの礫約150個が底面から25cmほど上にあり、下面は底面形状に合わせて中央部が窪む。埋没過程中に人為的にまとめられた可能性が高い。遺物は少ないが須恵器の破片が出土している。時期は出土遺物から1～2期と思われる。

ウ 明治時代以降 01溝の1基がある。地形の傾斜方向に軸を持つ。耕作土直下～底面まで灰白～褐色の砂礫等が堆積している。埋没時まで滞水した痕跡は窺えない。恐らく牛伏川の氾濫によって短期間に埋没したものと推定される。底面は段を有し、最深部は場所により異なる。調査区北部01溝から07住周辺には多数の鉄合等耕作の痕跡を検出しているが、堆積物は本址に酷似し、牛伏川の氾濫によって埋没した可能性が高い。

3 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器、金属製品、石器・石製品がある。

(1) 土器・陶磁器（第9～12図・第3・4表）

堅穴住居址を中心に、弥生時代、古代、中世以降の土器・陶磁器が出土している。なお、古代以降の器種・器形・年代観は文献1に従った。

ア 弥生土器

第03号住居址を中心に出土している。実測図で12点、拓影で12点を提示できた。実測図のうち明瞭に器形がわかるのは10・13・14が壺形土器（以下「形土器」は略す。）、15・16・17が甕で、11・12・18～21は底部である。胴部の開き具合から見て、おそらく11・12が壺、18～21が甕であろう。

壺10は口縁部から頸部下が残存しており、形態は口縁端部をわずかにつまみ上げている。紋様は頸部に、上から櫛描横線紋、櫛描斜走短線紋、櫛描波状紋の順に重ねている。壺13は頸部上部以上を欠くが、大きく胴が張り、最大径が胴部中位に来る形態をとる。紋様は頸部最上段に横位の櫛描波状紋、その下に櫛描横線紋を1本歯の櫛原体で切るT字紋Bが続き、その下に2条の櫛描波状紋、2段の櫛描斜走短線紋帯が続いている。14は壺の胴部破片からの復元で、現存する胴部上端に櫛描波状紋がみえる。

甕15は全形が予測でき、口径の割りに器高が低い。外面底部周辺を除き工具ナデ調整され、紋様は頸部を中心に、間隔をあけた3条の櫛描波状紋帯を上下に櫛描斜走短線紋帯が挟む形態をとる。底部付近の外面には綴のミガキがみられる。甕16は口縁部に最大径を持つもので、全形がわかる。紋様は頸部に1条櫛描波状紋を巡らし、その上下に斜走短線紋帯を配置している。内面下半部に横のハケメがみられる。甕17は胴部最大径以上を失っていて、紋様は不明である。外面の底部付近に綴のミガキがみられる。

拓影は、口縁部は(86)甕の1点のみだが、紋様としては櫛描波状紋(84・85・87・90・91・93)、櫛描斜走短線紋(86・88)、等間隔止め簾状紋2段重ね(94)、T字紋B(92・95)、波状紋と横線紋の組み合わせ(89)、などが見られる。小破片のため甕と甕の区別がつきがたいものが多いが、第3表のとおりである。

土器の時期は、全体的にみて櫛描斜走短線紋がある点から弥生後期前半台が与えられよう。

イ 古代の土器

土器・陶磁器の総出土量は約43kgである。全体のおよそ8割が住居址からの出土であるが、土坑・ピット・溝・検出面等からも少量出土している。種別は土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器がある。出土数量は甕類が多いが、図化提示したものは、杯碗類が多い。図・表には紙面の都合上、一部の71点のみを掲載した。時期は、1～11期に属する。

(ア) 種別・器種

土師器 食器には杯・椀・盤、煮炊具に甕・小形甕・瓶・羽釜がある。杯・椀類はすべて底部回転糸切りである。25は小形甕A、47は甕C（いわゆる武藏型甕）である。

黒色土器 食器には杯A・椀Aがあり、すべて底部回転糸切りである。

須恵器 食器には、杯A・椀A・杯蓋・鉢がある。貯蔵具は長頸甕・甕・甕がある。

灰釉陶器 食器には、碗・皿、貯蔵具に小瓶がある。

綠釉陶器 09住のみから小破片4点が出土した。59の碗は、胎土は褐色～暗灰色を呈し、濃緑色の施釉がされる。内面見込み部にトチン痕、外底部に糸切り痕が残る。

(イ) 時期の様相

1～2期：04住・05溝土器群が該当するが出土量は少ない。食器では須恵器杯A・貯蔵具では須恵器甕・甕類の破片、煮炊具に土師器甕A・小形甕A・瓶がある。須恵器杯Aは底部回転ヘラ切り後、ナデがされる。

3～4期：該当する土器群はみられない。

5～6期：06～08住・32土器群が該当。食器では須恵器を主として杯A・杯B・杯蓋Bがあり、黒色土器A杯Aもある。貯蔵具では須恵器長頸壺・甕・煮炊具に土師器甕B・甕C・小形甕Bがみられる。

7～8期：10・11住土器群が該当する。食器は土師器杯Aが比較的多く、黒色土器A碗・灰釉陶器碗A・皿もある。貯蔵具は須恵器甕類・小瓶・煮炊具は土師器甕Bがみられる。

9～10期：01・05・09・12住土器群が該当。食器は土師器杯A・黒色土器A杯A・須恵器鉢・灰釉陶器碗A・綠釉陶器碗がある。貯蔵具は須恵器甕類・小瓶・煮炊具は土師器甕B・小形甕D・羽釜がある。

11期以降：造構は非常に少なく、2住土器群のみが該当。量的にも少なく、食器で、杯A・盤B・灰釉陶器碗A・皿がある。

(ウ) 文字資料 墨書き土器7点出土した。出土遺構は05住(1点)、10住(6点)の2箇所である。判読できた文字は3文字各1点で、介(29)・杉(61)・賣(70)である。介(29)は、官職あるいは人名を、賣(70)は嘉字を意味する文字の可能性があり、注目される。

器種は土師器杯Aが5点、黒色土器A杯A・灰釉陶器皿が各1点である。墨書きの部位は体部外面6点、底裏1点である。時期をみると8期(10住)6点、9～10期(05住)1点になる。

ウ 中世以降の土器・陶磁器

白磁碗(60)が1点のみ出土している。09住から出土しているが、混入品と思われる。

文献1 長野県教育委員会『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』1990

(2) 金属製品(第13図 第5表)

鉄製品13点が出土している。このうち、鉄滓3点と10土から出土した近・現代と推定される丸釘、遺構外出土の3点を除く、6点を図化提示している。以下、種類別に記載する。

鉄鎌(1) 03住から出土。弥生時代の鉄鎌で、鎌身の中央下寄りに一孔を有する。孔の部分で破損しており、下側の形状はうかがえないが、非常に薄身であり無茎三角形式の可能性が高い。

紡錘車(2) 09住から出土。鋸ふくれが激しいが、緩やかな円状を呈する紡輪部の完形品である。

刀子(3・4) 3は10住から出土。両端が破損した小片であるが、片側縁が緩やかに湾曲していることから、茎部の一部と判断した。4は12住から出土。ほぼ完形だが、茎部が途中から折れ曲がっている。関は棟側にのみあり、身部の棟側は直線的であるが、刃側は直線的に徐々に減幅し、切先付近で反りあがっている。釘(5・6) 4点が出土し、2点を図示している。5は02住から出土。頭部は平坦であるが、斜め上方から叩かれて片側に屈曲している。6は12住から出土した、細身のほぼ完形品である。

鉄滓 3点が出土している。10住から3.5～5cmの大鉄滓が2点、検出面から1点が出土している。

その他 上記のほか、遺構検出面出土と出土地点不明の鉄製品があるが、いずれも小片で種類は不明である。

(3) 石器・石製品(第14図、第6表)

表面採集品を含めると合計57点の石器が出土した。出土遺構、器種、石材などの概要は一覧表で提示し、一部を図化した。ここでは図化した石器の一部補足説明にとどめる。

7・8は研磨痕が両面に観察される粘板岩製の石器で磨製石鎌とした。研磨面を切る剥離面、折れ面または被熱による剥離面が観察され、研磨後製品が破損したものと考えられる。また、03住からは粘板岩製の剥片が6点出土している。22・47は主に剥片の二側縁に二次加工が施された石器で両面加工石器としたが、石材から磨製石鎌の未製品とも考えられる。35はほぼ器面の全面に強弱はあるが研磨痕が観察される。38は敲打痕と研磨痕が観察される石器で複合石器とした。梢円状もしくは棒状礫が半割され、その半割した剥離面に研磨痕が観察される。敲打痕は半割する際についたものかその後についたものかは不明である。

IV まとめ

今回の調査では、牛伏川扇状地の扇端付近に形成された田川右岸段丘上に弥生時代、奈良～平安時代の豊穴住居址を中心とする集落の一部を確認した。遺構の分布状況から集落は調査区外に続いていると推定される。幸いなことに開発地の大部分を占める宅地部分は、盛土等により、遺構の破壊を逃れることができた。本遺跡のある田川右岸段丘上は、牛伏川の氾濫による堆積物に覆われ、他にも未知の遺跡が埋もれている可能性が高い。以下、今回の成果を時代毎に述べ、調査のまとめとしたい。

弥生時代 遺構は焼失家屋と思われる03住1軒のみ検出した。遺物から後期前半に帰属すると考えられる。弥生土器片は古代の住居址の覆土中や調査区全域の検出面でも出土していることから、周囲に同時代の遺構が存在する可能性が高い。過去に実施された周辺の調査から、田川右岸段丘上には西方の低地に水田耕作域を伴う小規模な集落が点在していたと考えられ、本遺跡もその内の1つであろう。

遺物は、03住から土器類を中心として石器・鉄製品の良好な資料を得ることができた。弥生土器は壺・甕類が多く、主に櫛描斜走短線紋が施紋される。鉄鏃は床面直下から出土し、同時代としては宮潤本村遺跡に統いて松本市内2例目の出土である。石器・石製品には磨製石鏃、削器、砥石等がある。

奈良・平安時代 調査区全域に豊穴住居址と土坑・ピット、調査区北部～北東部に溝状遺構を検出した。小規模な調査で、集落の変遷を述べるのは無理もあるが、時期毎にみてみたい。古代の開発は1～2期（7世紀末～8世紀初頭）に始まり、調査区北側に住居址1軒（04住）と3基の溝状遺構（03～05溝）がある。3～4期（8世紀中～後半）の遺構は確認されず、続いて5～6期（8世紀末～9世紀前半）に住居址3軒（06～08住）と土坑1基（32土）がある。7～8期（9世紀中葉～末）は住居址2軒（10・11住）がある。9～10期（10世紀前～中葉）は最も遺構数が多く、住居址4軒（01・05・09・12住）と05土等がある。11期（10世紀後葉）になると豊穴住居址1軒（02住）のみで、12期（11世紀前葉）以降の遺構はなく、集落は無くなる。

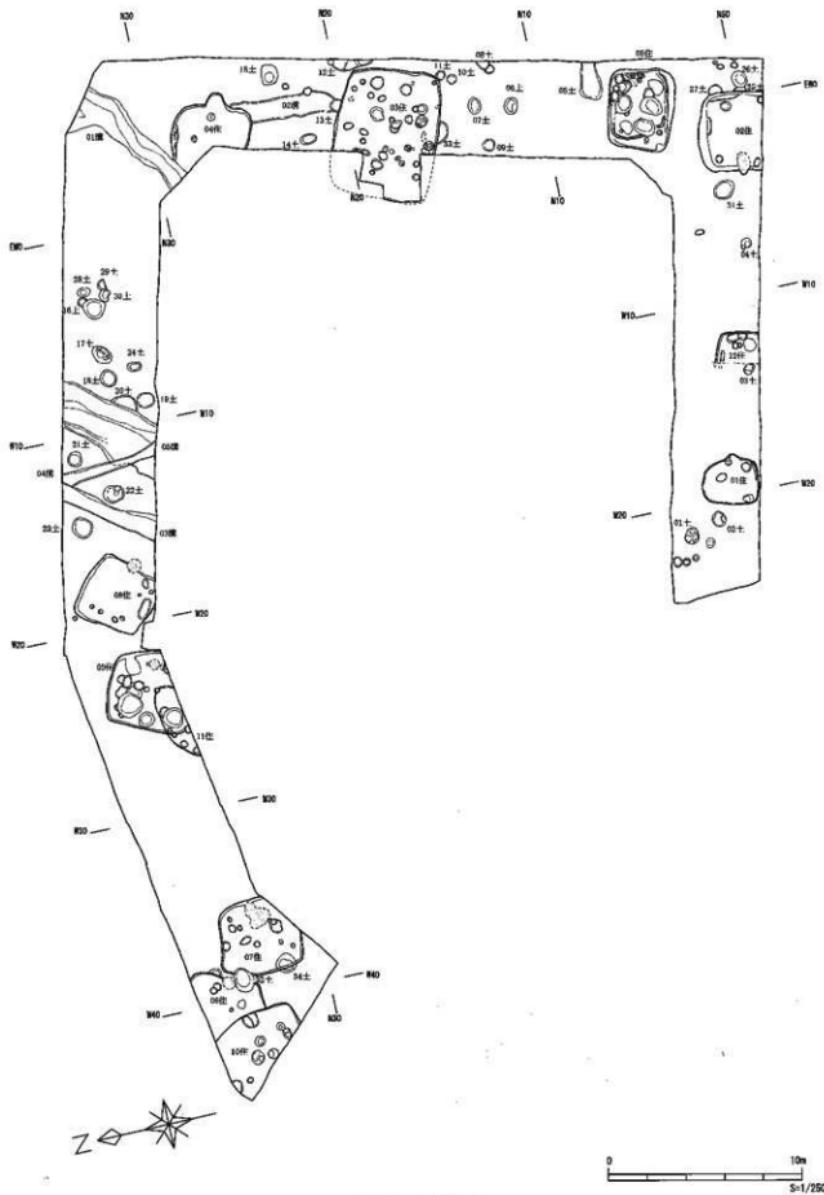
遺物では、墨書き土器が計7点出土し、8期の10住に6点と多く、1点が9～10期の05住から出土した。縁釉陶器は破片4点が09住から出土した。金属製品では、09住で紡錘車、10住に刀子と鉄滓、12住に釘と刀子がある。09住の遺物は中世の混入遺物を含む点で疑問もあるが、他の住居址とは組成が異なることから、周辺に有力者が存在した可能性もある。前述のとおり、本遺跡の南350mには小池・一つ家遺跡があり、大規模な調査が実施されて200軒を超える豊穴住居址や方形の柱穴や庇を作り建物址群等を確認し、多数の縁釉陶器や銅製帶金具等特殊な遺物も出土している。一帯は水田があまり発展しておらず、牧經營等に関わる有力者を中心とした集落と考えられている。集落は8世紀初頭に形成が始まり、9世紀中葉～末に最も栄え、10世紀後半には衰退して12世紀前半まで継続している。本遺跡は8世紀末～9世紀前半と10世紀前～中葉に発展する傾向が窺える点、10世紀後葉で途絶える点では異なるが、8世紀末～10世紀後葉の間は、近接して集落が営まれていることから、小池・一つ家遺跡と密接な関係をもつ集落であった可能性が高い。

中世以降 遺構は確認できなかったが、09住覆土中から玉縁の白磁碗片が出土しており、周辺に遺構があった可能性もある。また01溝と畠合等の一部は、明治時代の牛伏川氾濫によって埋没した遺構と考えられる。

最後になりましたが、今回の調査を実施するにあたり、多大なご理解とご協力をいただいた長野県労働者住宅生活協同組合ならびに寿小赤町会の皆様、また発掘調査参加者の皆様に記して感謝申し上げます。

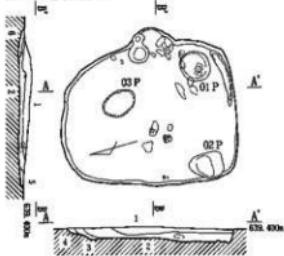
参考文献

松本市教育委員会 1997 「松本市文化財調査報告 №126 小池遺跡II 一つ家遺跡」



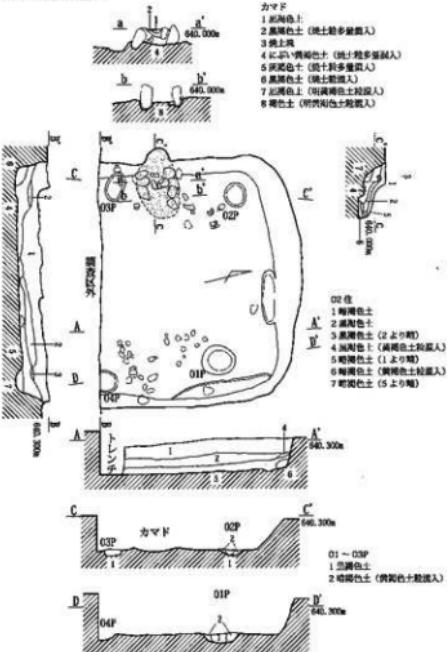
第4図 遺構配置

第 01 号住居址

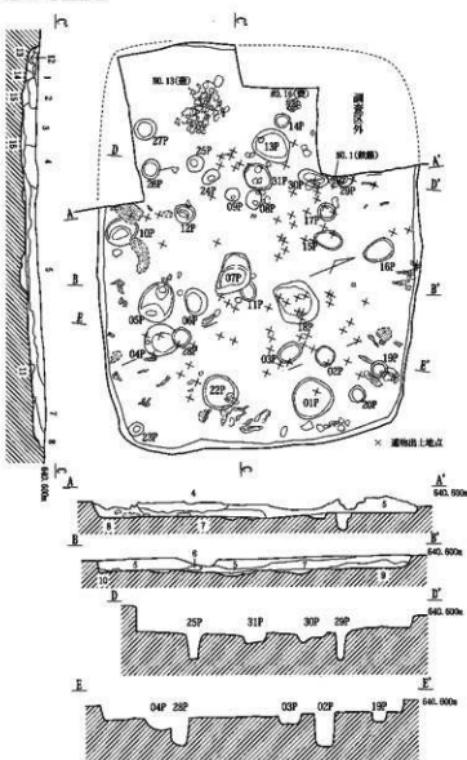


- 1 型褐色土(赤褐色土+稍多量混入)
 - 2 黑褐色土(花崗岩細微混入)
 - 3 墓褐色土(花崗岩擦出)
 - 4 にぶい黄褐色土
 - 5 にぶい黃褐色土(黄褐色土上斜面)
 - 6 黄褐色土(礁石粒多量混入)

第 02 号住居址



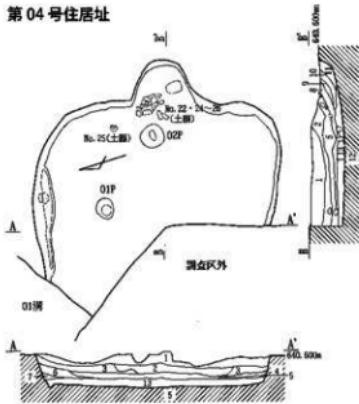
第 03 号住居址



- 03 住
1 黑褐色土 (褐黄色土质壤土)
2 黑黄褐色土 (花岗岩质壤土)
3 黑褐色土 (砾石沙质土)
4 黑褐色土 (灰化砖土质壤土)
5 黑褐色土 (砖瓦质砖土质壤土)
6 黑褐色土 (灰化砖瓦质壤土)
7 黑褐色土 (黄褐色土质壤土)
8 黑褐色土 (灰化砖土质壤土)
9 黑褐色土 (砾石土)
10 黑褐色土
11 黑褐色土 (灰化砖土质壤土)
12 黑褐色土 (黄褐色土质粘土质壤土)
13 黑褐色土 (10号土壤)
14 黑褐色土 (13号土壤)
15 黑褐色土 (砾石土, L. I. 被水冲刷)

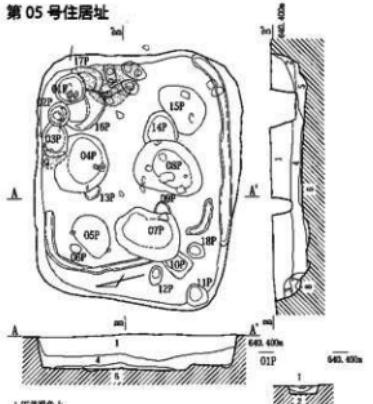
第5図 遺構(1)

第 04 号住居址



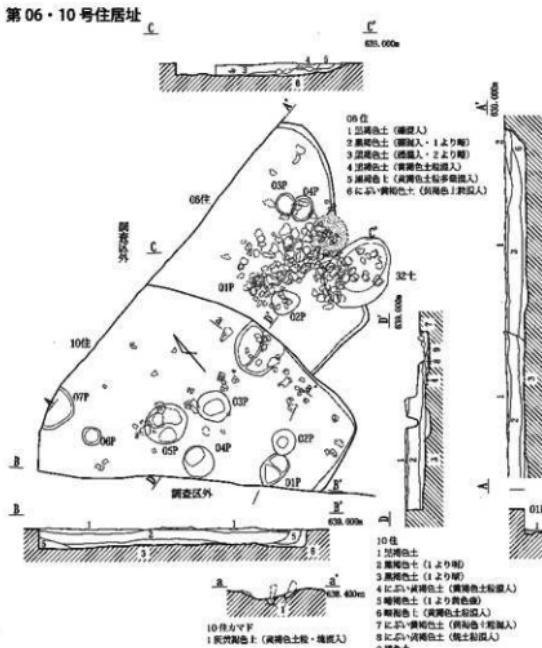
- 1 黑褐色土 (黑褐色土)
 - 2 黑褐色土
 - 3 黑褐色土 (花崗岩鵝卵石)
 - 4 黑~灰褐色土
 - 5 黑褐色土 (黑褐色土鵝卵石)
 - 6 黑褐色土 (黑褐色土鵝卵石)
 - 7 鹽化黑土 (鈉次鈣化帶鵝卵石)
 - 8 黑褐色土 (灰化鵝卵石鵝卵石)
 - 9 黑褐色土 (灰化鵝卵石)
 - 10 黑褐色土 (黑褐色土鵝卵石鵝卵石)
 - 11 亂石土 (黑褐色土 鵝卵石土、7より略)
 - 12 黑褐色土 (黑褐色土鵝卵石、1より略)
 - 13 に共用 (黑褐色土鵝卵石土鵝卵石)

第 05 号住居址



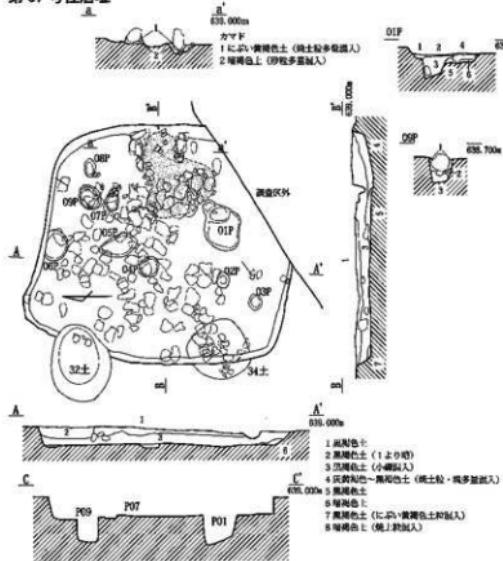
- 1 江戸茶色上
2 いにしへ茶色
3 江戸茶色上 (より明)
4 江戸茶色上 (より暗)
5 いにしへ茶色 (美濃色土塗深入)
6 江戸茶色上・薄・美濃色土塗混合
7 江戸茶色上 (より明)
8 火焰色上
9 火焰色上

第 06 · 10 号住居址

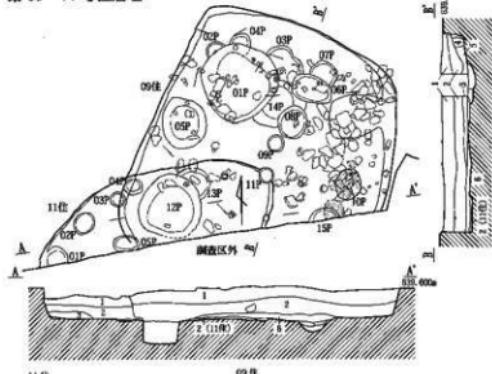


第6図 遺構 (2)

第 07 号住居址



第 09 · 11 号住居址



11 住 1 床或脚色上 (砂砾摄入)	12 住 1 床或脚色上 (小颗粒人)
2 IC-IV 黄褐色土 (砾砾层人)	2 に ふる 床或脚色土 (小砾粒人)
3 黑色土 (砂砾度人)	3 黑褐色土



09往04P

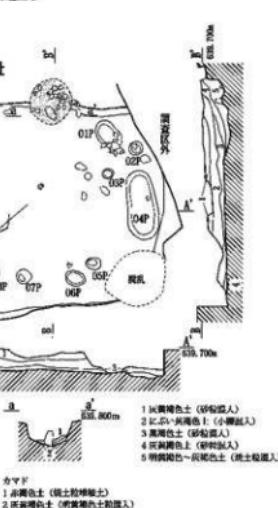
639.200m

1 黄褐色土
2 黑褐色土
3 黄褐土 (明黄褐色土层混入)
4 黄褐色土; 明黄褐色土+漂白土
5 淡黄色土。明黄褐色土层下部 (4より明る)

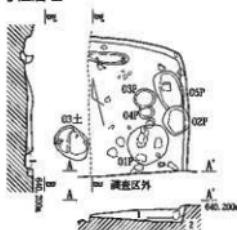


Geological cross-section diagram illustrating soil profiles and bedrock layers. The diagram shows a vertical profile with various layers labeled:

- Top layer:** 09住12P
- Soil horizons:**
 - 1 黑褐色土 (Blackish brown soil)
 - 2 黑褐色土 (より黄色調) (Blackish brown soil (more yellowish tint))
 - 3 棕褐色土 (より灰) (Brownish gray soil (more gray))
 - 4 灰黄色土 (より黄) (Grayish yellow soil (more yellow))
 - 5 灰褐色土 (より灰) (Grayish brown soil (more gray))
 - 6 灰黄色土: 明暗帶土質複合土 (Grayish yellow soil: Mottled soil composite soil)
- Bedrock:** 35.20m
- Bottom layer:** 土 (Soil)

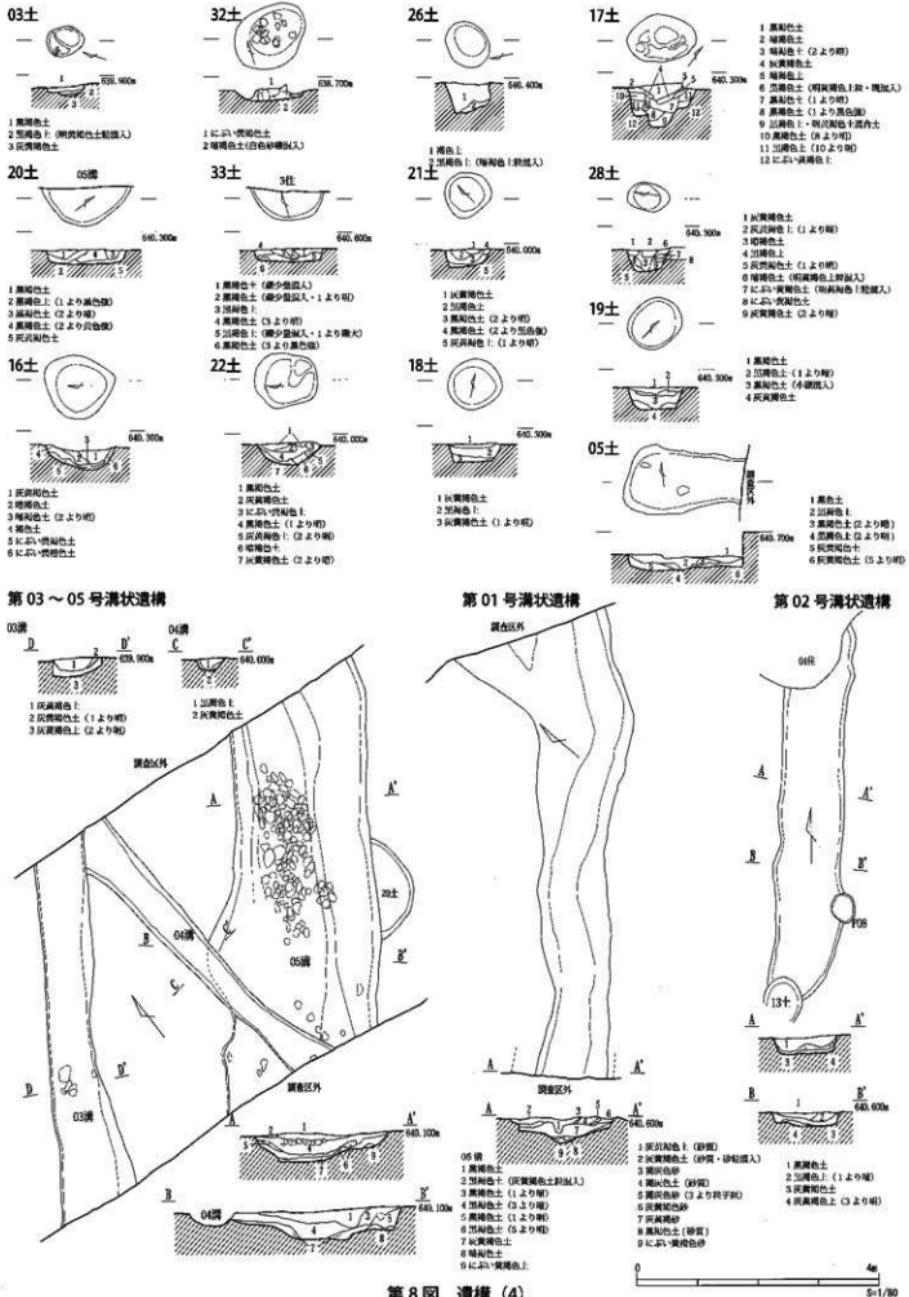


第 12 号住居地

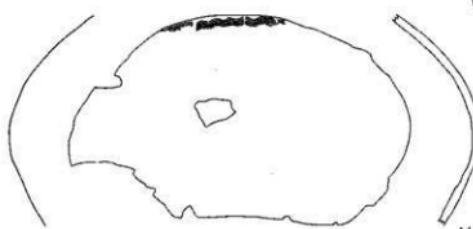
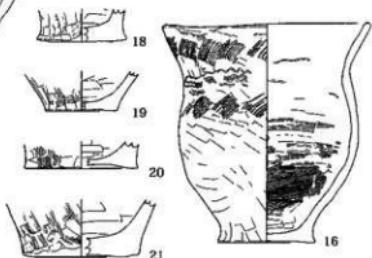
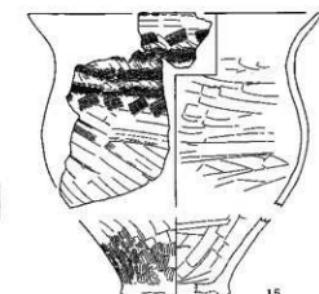
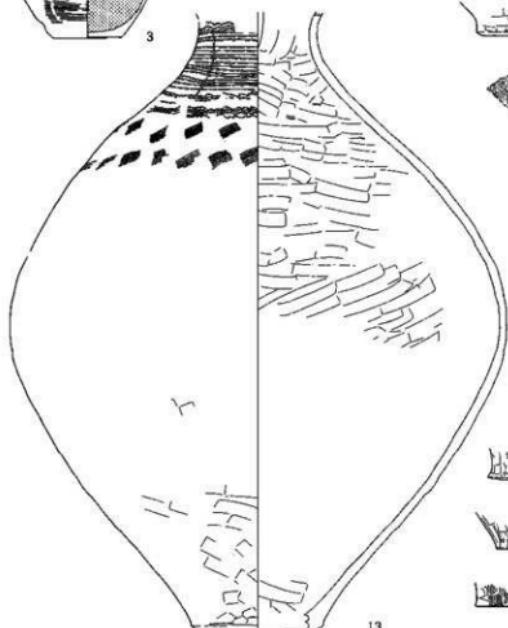
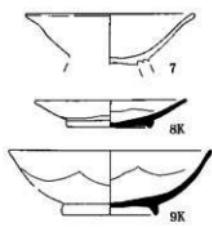
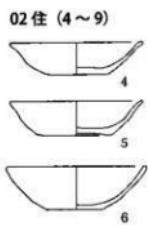
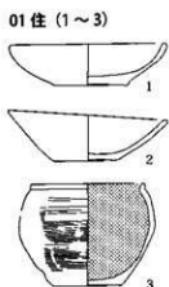


1. 仁和小脚包上
2. 仁和小脚包上 (姚上脚跟入)

第7図 遺構 (3)



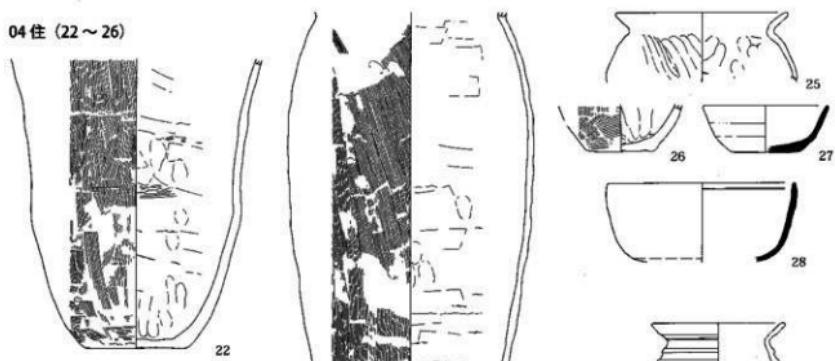
第8図 遺構 (4)



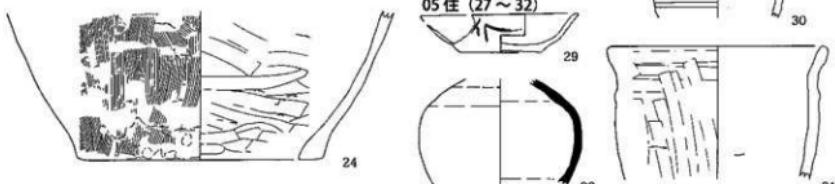
0 10cm
Scale 1/4

第9図 出土土器 (1)

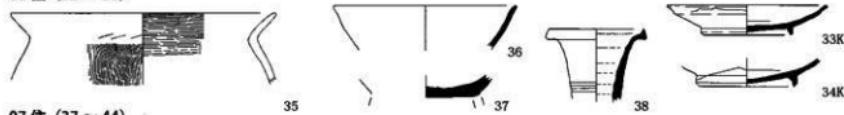
04 住 (22 ~ 26)



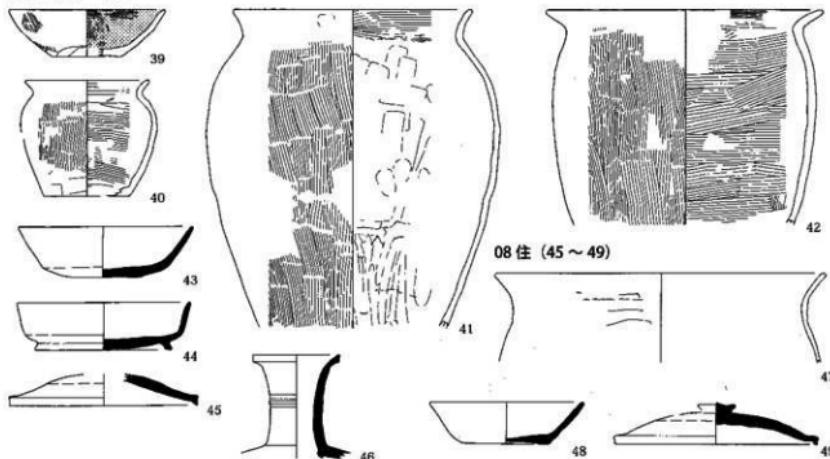
05 住 (27 ~ 32)



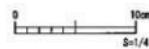
06 住 (33 ~ 36)



07 住 (37 ~ 44)

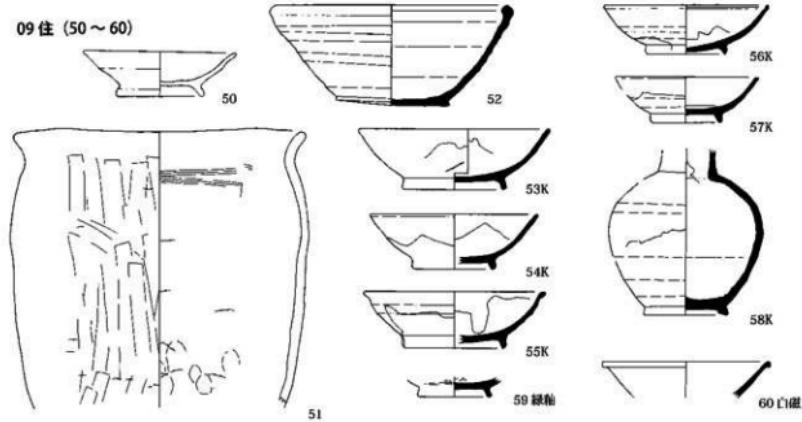


08 住 (45 ~ 49)

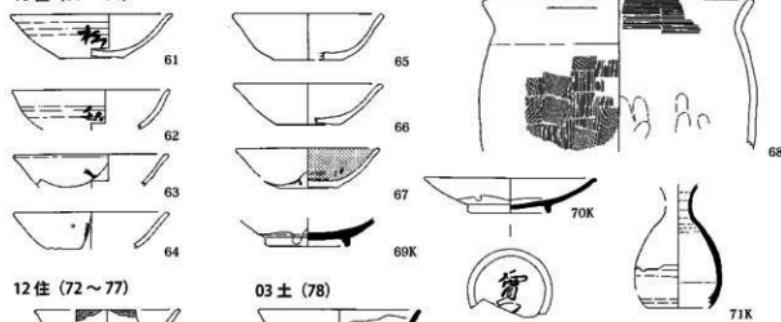


第 10 図 出土土器 (2)

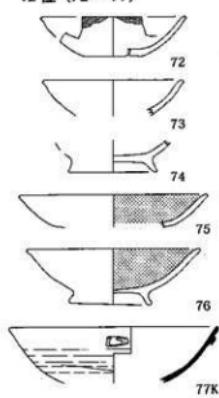
09 住 (50 ~ 60)



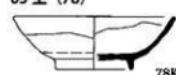
10 住 (61 ~ 71)



12 住 (72 ~ 77)



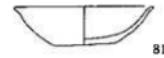
03 土 (78)



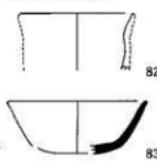
03 土 (79.80)



P01 (81)

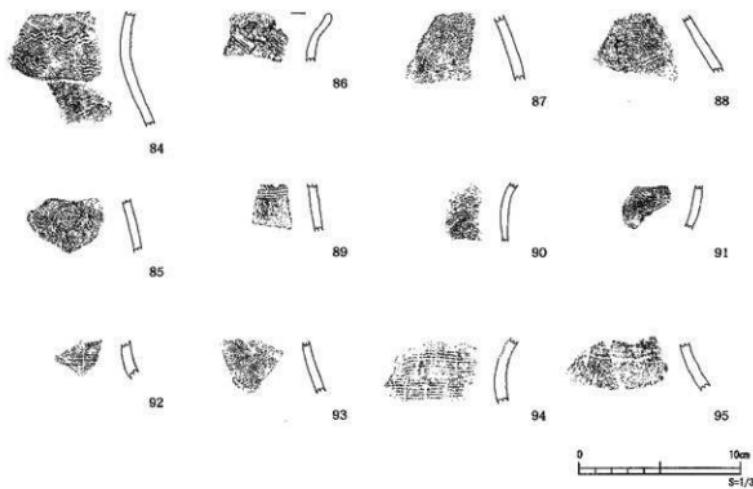


05 溝 (82.83)

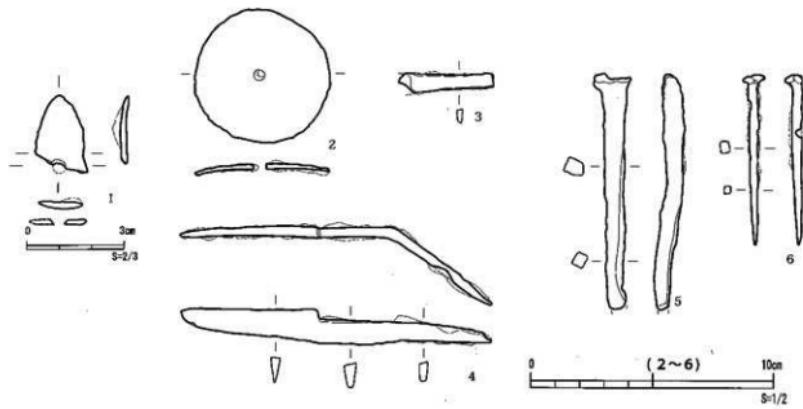


第 11 図 出土土器 (3)

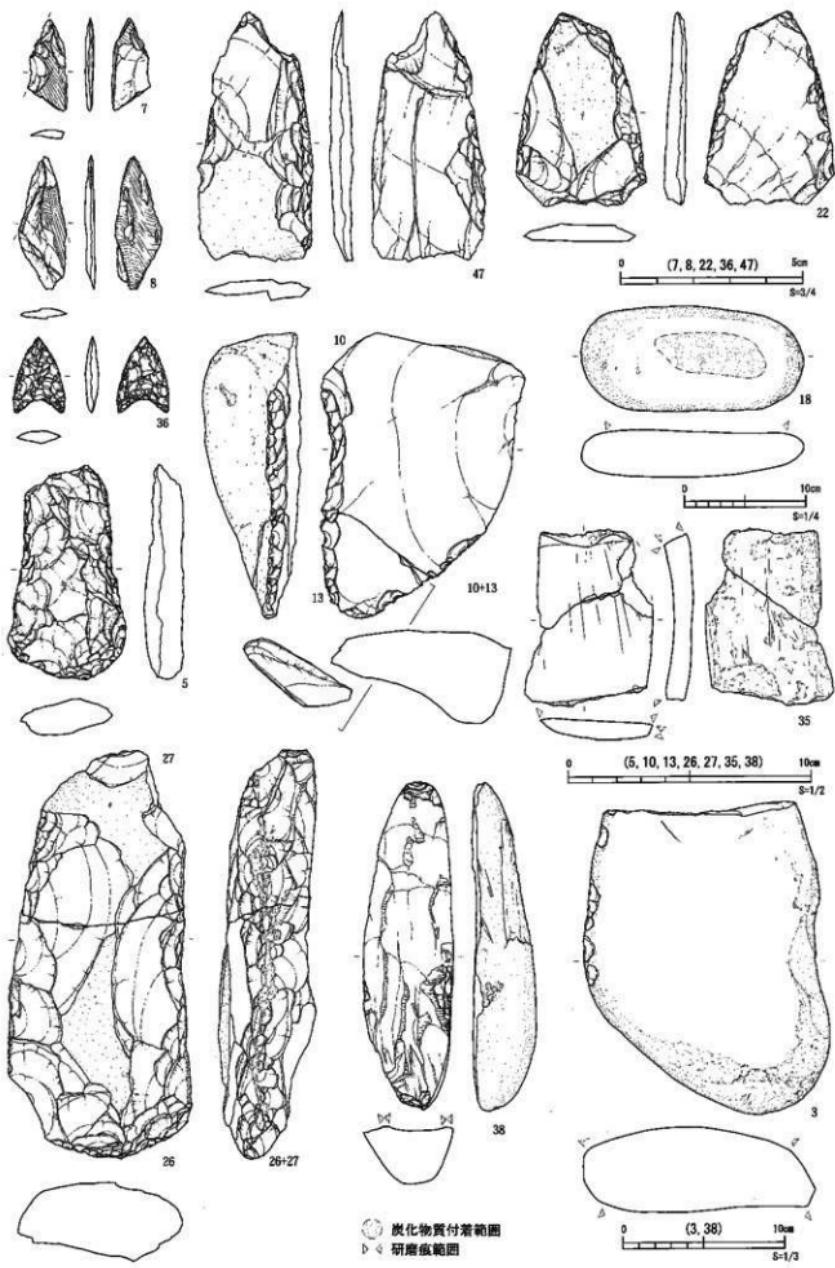




第12図 出土土器



第13図 金属製品



第14図 石器・石製品

第1表 住居址観察表

住居 No.	面 No.	平面形	規模(cm)				床面積(m ²)	長軸方位	戸・カマド形態、 壁際・位置	時期	遺構所見	
			長轴	短轴	南北	東西						
01	5	扇形	288	258	13	8	6	6.05	N-11°-E 壁振り込み・東壁中央	9期		
02	5	扇形?	326	422	45	7	18	40	(12.67) 不 明	壁下・西壁中央?	11面	南壁は調査区域外
03	5	扇形?	660	530	20	23	17	6	(23.86) N-70°-W 鉢上・壁振り込み	浮生後期前半	床面に火材被出	
04	6	不 明	336	490	45	34	35	7	(10.34) N-25°-W 柱上・壁振り込み	1~2期	01 壁に切られる	
05	6	扇形?	404	328	54	50	66	49	12.64 N-75°-W 壁下・東壁中央	9~10期	底塗の可塑性有	
06	6	不 明	?	7	11	25	7	(7.54) 不 明	壁下・東壁中央	6~7期	10件に切られる	
07	7	扇形?	408	396	35	19	27	27	(13.57) N-7°-W 右斜・壁下・東壁中央や北	5期	壁上中に多數の漆ぬれ	
08	7	方 形	286	332	39	-	35	7	(11.54) N-41°-E 壁振り込み・東壁中央	5期	南面周辺調査区域外	
09	7	方 形?	340	(362)	37	-	12	40	(12.77) N-21°-E 右斜・壁下・東壁北端	10期前後	11住を切る	
10	6	不 明	(448)	(294)	-	20	-	-	(11.6) 不 明	壁下・東壁中央より?	8期	06 住を切る
11	7	不 明	?	?	-	-	-	9	(3.97) 不 明	土器出	9期	09 住に切られる
12	7	不 明	(228)	(156)	37	-	-	-	(3.46) 不 明	東壁中央?	9期	床西側は、削平され消失

()は推定値 < >は残存値

第2表 土坑觀察表

土坑 No.	平面形	規模(cm)			時期	備考
		長轴	短轴	深さ		
01	橢円形	86	70	18		底面有隙
02	橢円形	80	70	8		
03	橢円形	62	44	19	9期	12住に伴うピットの可能性あり、底面有隙、上部・陶器類No.78出土
04	不整橢円形	52	38	25		
05	(不整形)	192	132	31	9期	古代土加温・須恵片出土
06	橢円形	86	64	38		底面有隙
07	橢円形	84	64	29		
08	(橢円形)	70	44	11		
09	円 形	68	64	20		
10	円 形	50	48	16		壁上中に多數の縫合跡
11	円 形	50	50	15		
12	不 明	(70)	(52)	15		
13	(円形)	50	(62)	18	先牛後剥削以前	01 畏を切り、05 住に切られる、海生十端片出土
14	橢円形	84	52	18		
15	橢円形	108	102	20		
16	不整橢円形	108	102	39		
17	橢円形	112	72	72	古代?	柱痕状の堆積台り、古代の土師器片出土
18	円 形	90	80	32		
19	橢円形	96	80	39		
20	(橢円形)	(148)	(64)	25	1~2期以前	05 住に切られる
21	円 形	78	74	39		
22	不整円形	106	85	39		
23	円 形	208	174	33	古代?	底面有隙、古代土師器片、灰陶片出土
24	橢円形	74	44	13		
25	橢円形	66	(24)	14	11期以前	26 住に切られる
26	(円形)	82	(54)	14		25 住を切る
27	(円形)	72	(42)	6	11期以前	02 住に切られる
28	橢円形	68	44	41		柱痕状の堆積台り
29	橢円形	(58)	40	8		30 住に切られる
30	不整橢円形	40	42	46		29 住を切る
31	橢円形	60	(29)	21		
32	円 形	124	96	12	5~6期	06~07 住を切る、十数個の縫合を含む、土器・陶器類No.79~80出土
33	(橢円形)	(120)	(45)	29	先牛剥削以前	05 住に切られる
34	不整円形	98	98	20	5期以前	07 住に切られる

()は想定値 < >は残存値

第3表 弥生土器觀察表

番号 番号	土器 名	寸法(cm)		断面図	測量および観察	断面	内面	外側	備考	
		口径	底径							
10 03 住 倉	口縁一 底縁	(13.0)		口縁部 1/12	内 上部: 口縁ナガテ下部: 鋼鉄錆、流状灰、鉢底付 内: 口縁部ヨコナガ、工具ナガ、輪縫み有り	石英・黑石少 海生十端粒 一端縫合	外 黒 内 灰	内外面とも摩滅なし 内面輪縫み有り		
11 03 住 倉?	底縁	(8.0)		底縁 1/4	内 上: 口縁ナガ 内: 工具ナガ	石英多海生灰~小石 底: 口ナガ	外 汎 内 海生	底面に木炭斑あり		
12 03 住 倉?	底縁	(8.0)		底縁 1/2	内 上: 口縁ナガ 内: 工具ナガ	石英・黑石少 海生十端粒 一端縫合	外 汎 内 海生	底面に木炭斑あり		
13 03 住 倉	腰部~ 底部	11.0		底縁 一部腰付	内: T字ナガ、波状文、鉢底付 上部: 縫合段(口縁部腰部のみ)ナガ輪縫み有り、 底: 口ナガ(腰部腰部L型)	灰・海生灰~砂粒 灰石粘土	外 黒一端縫合 内 黑一端縫合	内外面とも摩滅なし 一端縫合部位は5本		
14 03 住 倉	腰部				内: 工具ナガ	海生 底: 口ナガ	外 海生 内 海生	内外面とも摩滅なし		
15 03 住 倉	口縁一 腰部	(12.5)	(9.0)	口縁部 1/5 腰部 1/8	外: 口縁ヨコナガ 上部: 工具ヨコナガ、鉢底付 下部: T字ナガ、刃矢、ナガ、ナダ、底縁: 制縫 内: ヨコナガ、輪縫み有り 口縁部ヨコナガ	灰・海生灰 灰石粘土	外 黑 内 海生	上部と底部の位置がないが4-1個体		
16 03 住 倉	口縁一 底部	17.4	8.2	18.0	口縁部 3/4 腰部 完	上部: T字ナガの腰部は腰縫合、灰灰灰 下部: 口ナガ、底縁: 制縫、ナガ、何の位置あり 内: 腹巻工芸による縫合段	灰石・灰灰灰 一端縫合	外 黑一端縫合 内 黑一端縫合	内面と外面上部摩滅している	
17 03 住 倉	腰部~ 底部				内: 上部: 工具ナガ、下部: 工具ナガのちミナガ、 底縁: 制縫により調整可能 内: ヨコナガ	灰・海生灰~砂粒 灰	外 海生~泥灰 内 海生~黒	内外面若干スリッパ		
18 03 住 倉?	底部	(7.0)		底縁 2/3	外: 口ナガ、底縁: ナダ?	灰石	外 汎 内 海生			
19 03 住 倉?	底縁	(8.0)		底縁 1/2 縫	外: 工具ナガ	灰石 底縫合~一端縫合 内: 工具ナガ	外 黑一端縫合 内 海生~泥灰			

報告書番号	出土場所	形態	個数	寸法 (cm)		種別	測定および枚数		出土	色調	備考
				口径	底径		横幅	高さ			
20 03 件	夏?	縦縫	8.4		底部 1/3	外 工芸ナデ及びミカゲ、内壁:上口による調整	灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸			
21 03 件	夏?	縦縫	8.7		底部 3/8	外 ハラ状工によるナダ、底部:上口による調整 内 工芸ナデ	青白・白少微 灰・薄鐵紅～砂粒	内 色調			
84 02 件	夏?	縦縫				外 工芸ナデのち鉢形、斜辺切缺	褐色鐵紅～砂粒	外 開口一端丸			
85 02 件	夏?	縦縫				内 工芸ナデ、鉢形底切缺	灰・薄鐵紅～砂粒	内 色調			
86 03 件	夏?	縦縫				内 工芸ナデ、鉢形底切缺	灰・薄鐵紅～砂粒	内 色調			
87 03 件	夏?	縦縫				外 細縫縫、ミガキナダ?	石青多壁開口～砂粒	外 案用			
88 03 件	夏?	縦縫				内 工芸ナデ	石青・山白、青白多壁 灰・薄鐵紅～砂粒	内 色調			
89 03 件	夏?	縦縫				外 工芸ナデ、底状缺、鉢形缺	(灰)少微鐵紅～砂粒	外 色調			
90 03 件	夏?	縦縫				外 底状缺	灰・薄鐵紅～砂粒	内 色調			
91 03 件	夏?	縦縫				内 工芸ナデ	灰・薄鐵紅～砂粒	内 色調			91とは一個体?
92 05 件	夏?	縦縫				外 工芸ナデ、底状缺、鉢形缺	灰・薄鐵紅～砂粒	外 色調			
93 05 件	夏?	縦縫				内 工芸ナデ	灰・薄鐵紅～砂粒	内 色調			
94 未出	夏?	縦縫				外 圓筒形、工芸ナデ	灰・山白、石青少微鐵紅	外 案用			
95 未出	夏?	縦縫				内 工芸ナデ (底部に鉢形)	灰・山白、石青少微鐵紅	内 色調			
96 未出	夏?	縦縫				外 上部:細縫 T字状 B、下部:上口ナダ?	灰・山白、鉢形～砂粒	外 案用			
97 未出	夏?	縦縫				内 工芸ナデ	灰・山白、鉢形～砂粒	内 色調			

第4表 古代土器観察表

No.	出土	形態	寸法 (cm)	種別	寸法 (cm)	測定	寸法 (cm)	測定	出土	色調	備考
1	01 住	土師器	新A	13.5	5.5	4.0	7.8	8	外 SL鋸刃コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
2	01 住	土師器	新A	13.1	6.2	3.6	9.10	10	外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅、墨青	内 墨青
3	01 住	土師器	小B	9.4	2.8	8.9	1/3	2.6	外 L縫縫引込コチナ、鉢形底切引 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
4	02 住	土師器	新A	11.0	5.1	2.8	3/4	4	外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
5	02 住	土師器	新A	11.0	5.6	3.0	3/4	4	外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
6	02 住	土師器	新A	11.6	4.9	3.7	3/4	4	外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
7	02 住	土師器	盤B	14.0			1/2		外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
8	02 住	土師器	盤	12.6	6.9	2.4	半圓周	8	外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
9	02 住	土師器	盤A	8.0	5.0	5.6	1/5	8	外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
22 04 作	上縫縫	盤B	(9.4)			3/4			外 彩色鐵紅のLハメ 内 彩色鐵紅のLハメ	彩色鐵紅～胡蝶 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
23 04 住	土師器	盤B							前縫縫引込み、鉢形底切引のち工芸底 内 鉢形底切引、鉢形底切引のち「几」	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
24 04 作	上縫縫	盤	(20.4)						外 ハケナ、底状、ヘラカズリのちナダ? 内 ハケナの上工芸ナダ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
25 04 作	上縫縫	盤A	(14.4)			1/6			外 ハケナコチナ、ロクナデ 内 ナダ、口縫引込コチナ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
26 04 作	上縫縫	盤B	(6.0)						外 ハケナ 内 ハケナ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
27 04 住	漆器皿	杯A	(10.5)	(6.0)	4.1	1/6			外 L縫縫引込コチナ、ロクナデ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
28 04 住	漆器皿	盤B	(15.0)			1/6			外 ロクナデ、L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
29 05 住	土師器	杯A	(12.0)	7.0	3.3	1/2	尤		外 ロクナデ、L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
30 05 住	上縫縫	盤B	(11.0)			1/6			外 ロクナデのちナダ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
31 05 住	上縫縫	盤B	(18.0)			1/6			外 ロクナデのちナダ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
32 05 住	漆器皿	漆器皿							外 ロクナデ? 上部: 前の山輪、ヘラカズリ 内 ロクナデ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
33 05 住	漆器皿	皿	(13.2)	(7.4)	2.6	1/5	1/3		外 ロクナデ、口縫引込のちナダ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ、口縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
34 05 住	漆器皿	皿A			7.9				外 ロクナデ? L縫縫引込コチナ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
35 06 住	上縫縫	盤B	(22.0)			1/10			外 ロクナデのちナダ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデのちナダ? L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
36 06 住	漆器皿	杯B	(15.2)			1/8			外 ロクナデ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
37 06 住	漆器皿	杯				1/3			外 ロクナデ? ヘラカズリ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
38 06 住	漆器皿	皿				1/3			外 ロクナデ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長 内 延長
39 07 住	漆器皿	杯A	(12.0)	(4.0)	3.1	1/4	1/4		外 ロクナデ? ヘラカズリ 内 ロクナデ、口縫引込のちナダ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ、L縫縫引込切	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸
40 07 住	漆器皿	小B	(10.0)	7.2	10.0	1/3			外 L縫縫引込コチナのちナダ? L縫縫引込コチナ 内 ロクナデ	褐色鐵紅～砂粒 灰・薄鐵紅～砂粒	外 延長一端丸

No.	生土 地名	種別	寸法(cm)			測定者	成形・調査		地上	色調	備考	
			口径	高さ	幅員		口縁部	底部				
41	79 床	土壁面	要 B	19.8		1/6	外 口縁部ヨコナダ、底部ハケメ 内 口縁部ヨコナダのちハケメ 壁幅: 工事ナダ、下部側面直角・船底み造	褐色、灰色地盤・砂粒 石英、鈍鉄一鉛灰 青灰	外 茶褐色 内 灰褐色			
42	79 床	土壁面	要 B	(23.2)		1/20	外 開口ケズ、口縁部ヨコナダ 内 国ヨケズ、口縁部ヨコナダ	灰・褐色地盤・砂粒 石英、鈍鉄一鉛灰 青灰	外 灰 内 灰褐色			
43	79 床	土壁面	要 A	14.6	6.5	4.5	2/3	灰	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰・褐色地盤・砂粒 石英、鈍鉄一鉛灰 青灰	外 灰 内 灰褐色	
44	79 床	土壁面	要 B	(14.5)	11.2	4.0	1/3	1/2	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英、鈍鉄一鉛灰 青灰	外 灰 内 灰褐色	
45	79 床	実測標	等高日	(15.0)			1/2	外 ヨコナダ 内 ヨコナダ 外 ヨコナダ、上部へケズリ 内 ヨコナダ	褐色地盤・砂粒 石英、鈍鉄一鉛灰 青灰	外 灰 内 灰褐色		
46	79 床	実測標	等高日	(7.2)			1/4	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰・白鉛灰・砂粒 石英	外 灰 内 灰	Q断面	
47	80 床	土壁面	要 C	(27.0)			1/12	外 ハケメ 内 ハケメ、口縁部ヨコナダ 外 ハケメ、口縁部ヨコナダ 内 ハケメ、口縁部ヨコナダ	褐色地盤・砂粒 石英、鈍鉄一鉛灰 青灰	外 灰 内 灰褐色	いわゆる式壁地質	
48	80 床	土壁面	要 A	12.6	7.3	3.6	3/4	灰	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英、鈍鉄一鉛灰 青灰	外 灰 内 灰褐色	内側に火葬塗あり
49	80 床	実測標	等高日	(17.1)			3/6	外 ヨコナダ 内 ヨコナダ 外 ヨコナダヨコナダ 内 ヨコナダヨコナダ	灰地盤・白鉛灰・砂粒 石英	外 灰 内 灰褐色		
50	80 床	土壁面	要 C	13.3	7.6	3.9	2/3	灰	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	褐色・灰色地盤・砂粒 石英	外 灰褐色 内 灰	
51	80 床	土壁面	要 B	(25.3)			1/3	外 ハケメ 内 ハケメ、口縁部ヨコナダ 外 ハケメ、口縁部ヨコナダ 内 ハケメ、口縁部ヨコナダ	褐色・灰色地盤・小石 石英	外 灰 内 灰褐色	丹波山付近、口縫が大きくなむ	
52	80 床	実測標	萩	20.1	9.9	8.7	2/3	3/4	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ 外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ	灰地盤・白鉛灰・小石 石英	外 灰 内 灰褐色	内側にスズ付村(殿倉後か)?
53	80 床	実測標	萩	(16.0)	(8.0)	5.2	1/4	2/3	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	高台場跡に古墳あり
54	80 床	実測標	萩	(14.0)	(7.3)	4.8	1/2	3/6	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	外側にヘラ印「」あり
55	80 床	実測標	萩	(15.0)	(8.0)	4.9	1/4	2/5	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	実測標跡、内側に使用感あり
56	80 床	実測標	萩	(14.4)	(7.2)	4.2	1/3	1/2	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	実測標跡、半袖引きぬきあり
57	80 床	実測標	萩 A	(12.6)	5.3	4.6	1/4	7/6	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	半袖引きぬき、半袖引きぬきあり
58	80 床	実測標	萩	(7.5)			2/6	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ	灰地盤・砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	高台・火葬塗、高台地盤在あり	
59	80 床	実測標	萩	(6.4)			1/3	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダヨコナダ	褐色・胡桃色 石英	外 茶褐色 内 灰	内側込みにトレンチ感あり 硫化鐵化	
60	80 床	白堀	萩	(14.3)			1/8	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	灰色 石英	外 茶褐色 内 灰	中央に歯の歯塗(注入塗)	
61	80 床	土壁面	萩 A	14.0	5.6	3.8	1/2	1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	外側に黒塗「」?あり
62	80 床	土壁面	萩 A	13.6			1/3	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	外側に茶褐色	
63	80 床	土壁面	萩 A	13.4			1/4	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	外側に茶褐色	
64	80 床	土壁面	萩 A	13.4			1/4	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	外側に茶褐色	
65	80 床	土壁面	萩 A	5.8			1/5	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	砂粒	
66	80 床	土壁面	萩 A	12.9	5.8		1/4	1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	砂粒
67	80 床	土壁面	萩 A	12.4	5.0	3.5	1/5	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	外側に茶褐色	
68	80 床	土壁面	萩 B	(23.0)			1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	内側に茶褐色物在り	
69	80 床	実測標	萩 A		7.3		1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	内側に茶褐色物在り	
70	80 床	実測標	萩 A	15.0	7.1	3.6	2/3	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	砂粒 茶褐色物 外側に茶褐色在り、 外側面に墨書き「質」あり	
71	80 床	実測標	萩 A		15.6		1/3	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	内側に茶褐色物在り	
72	80 床	土壁面	萩 A	(12.6)	(5.4)	3.4	1/4	1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	内側に茶褐色物在り
73	80 床	土壁面	萩 A	(12.2)			1/4	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	口縁部ヨコナダあり	
74	80 床	土壁面	萩		7.3		2/6	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	口縁部ヨコナダ	
75	80 床	土壁面	萩 A	(16.3)			1/3	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	外側に茶褐色	
76	80 床	土壁面	萩 A	15.0	7.2	4.8	2/3	外 ヨコナダ、付近高のちヨコナダ 内 ヨコナダヨコナダの上部ヨコナダ・下部ヨコナダ 外 ヨコナダヨコナダのヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 黄	外側に茶褐色 内 黄	
77	80 床	土壁面	萩 A	(13.2)			1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	元黒漆剥け 墨書きによる物体跡に墨書きが付着	
78	80 床	土壁面	萩	(13.7)	8.6	4.6	1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	元黒漆剥け	
79	80 床	土壁面	萩 A	(8.0)	7.0	5.6	1/3	1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	門脇跡在り
80	80 床	土壁面	要 B		(7.6)		1/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、下部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰	内側に茶褐色	
81	80 床	土壁面	萩 A	12.1	5.5	3.4	2/3	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰		
82	80 床	土壁面	小瓶	(10.0)			1/3	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰		
83	80 床	土壁面	萩 A	12.2	(7.5)	4.5	2/2	外 ヨコナダ、口縁部ヨコナダ 内 ヨコナダ	砂粒 石英	外 茶褐色 内 灰		

第5表 金属製品観察表

No.	形態	種別	出土遺物	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	残存部位 (破損部位)	備考
1	1	鉄	03住	(23.2)	(16.2)	(2.8)	1.8	錐身部上半 刃部	薄身
2	2	鉄鋸齿	09住	55.0	53.8	2.2	21.9	鋸齒	完形
3	3	刀子	10住	(38.6)	(5.9)	(3.4)	3.3	至刃 内彎曲	
4	4	刀子	12住	137.5	13.2	4.9	16.6	ほば尖形 (刃端の一部)	
5	5	釘	02住	(95.7)	14.7	8.2	18.3	頭・削離 (先端欠)	
6	6	釘	12住	69.4	(6.7)	6.3	4.3	錐ば宛形 (頭部崎欠)	
7	7	釘	10七	(34.0)	5.9	6.0	1.0	衝・削離 (先端欠)	丸町 五・現代
8	8	釘	調査区 北側	(27.0)	(5.5)	(5.7)	1.2	頭下部 (内彎欠)	
9	9	釘	10住	35.1	27.2	23.9	31.2	-	
10	10	釘	10住	50.4	35.0	31.3	53.2	-	
11	11	釘	西区 東側	38.9	28.2	18.1	31.3	-	
12	12	不明	調査区 南側	(29.1)	(10.0)	(7.1)	1.3	一部板	馬鹿
13	13	不明	不明	(24.9)	(8.4)	(5.4)	2.0	先端部	刀子の部?

第6表 石器・石製品観察表

No.	出土遺物	形態	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	欠損	備考
1	01住	片状	2.7	3.1	0.7	7.7	珪質岩	折れ	
2	01住	微細削有削片	2.8	1.2	0.3	0.8	黑曜石	前れ	
3	02住	碎片	19.4	15.5	5.5	2490.0	砂岩	折れ	平手彫刻 研磨面2面
4	02住	打削石片	2.9	5.0	0.8	14.9	磨耗板端	折れ	
5	02住	打削石片	8.5	4.8	1.5	79.5	砂質粘板岩	一定形	
6	02住	片状	2.8	4.1	0.6	8.8	褐色腐灰岩	折れ	
7	03住	磨耗石片	2.5	1.1	0.2	0.7	軽板岩	折れ	
8	03住	剥離石片	3.7	1.3	0.3	1.1	船板岩	折れ	
9	03住	剥離片	3.5	1.6	0.3	1.8	船板岩	折れ	
10	03住	剥離	10.7	8.2	3.4	329.4	砂岩	折れ	13と結合
11	03住	被削石片	4.7	5.6	4.8	147.6	砂岩	黒曜跡	一帯赤斑
12	03住	圓片	4.2	5.7	1.2	32.9	砂岩	完形	
13	03住	刮削	3.6	4.9	1.0	18.3	砂岩	折れ	10と接合
14	03住	刮片	1.2	1.2	0.1	0.1	船板岩	完形	
15	03住	剥片	2.6	5.1	0.4	4.1	船板岩	完形	
16	03住	剥片	3.1	2.5	0.3	2.6	船板岩	折れ	
17	03住	刮片	3.2	2.6	0.2	1.7	船板岩	完形	
18	03住	砾石	18.3	5.8	3.8	926.5	砂岩	完形	スヌードル化物質付着・被削 研磨面1面
19	03住	圓片	1.5	1.9	0.7	2.7	石英	折れ	
20	03住	刮片	0.9	3.8	0.3	1.0	船板岩	折れ	
21	03住	微細削有削片	2.7	1.4	5.0	1.6	黑曜石	折れ	
22	04住	両面加工石器	5.3	3.5	0.6	12.2	頁岩	完形	磨耗石未製品?
23	05住	縫	11.6	4.1	2.7	172.7	圓錐形灰岩	完形	神狀
24	05住	縫	9.0	3.9	1.8	86.3	砂岩	完形	神狀
25	05住	縫片	5.5	3.3	0.8	21.8	頁岩	折れ	
26	05住	打削石片	19.7	7.8	3.3	361.0	砂岩	折れ	27と結合
27	05住	打削石片	7.4	6.4	3.2	183.0	砂岩	折れ	25と結合
28	05住	便片	4.0	2.2	1.1	8.2	石英	完形	
29	05住	被削石片	8.0	8.2	2.0	171.6	砂岩	完形	
30	05住	圓片	3.5	2.5	1.4	11.2	石英	完形	スヌードル化物質付着
31	05住	砾石	14.3	4.0	1.9	183.2	泥質酸灰岩	完形	物状 研磨面2面+中心削い
32	06住	砾石	17.7	15.2	2.9	1230.0	砂岩	完形	研磨面有 平手彫刻 研磨面1面
33	06住	被削石片	10.3	8.4	6.8	579.4	砂岩	黒曜跡	スヌードル化物質付着
34	06住	砾石	16.5	5.6	2.2	320.4	泥質風岩	鋸削	神狀
35	06住	風化	7.2	5.3	1.0	46.3	風化砾石	新削	飛鏢頭折損 番平手彫刻 研磨面5面
36	07住	打削石片	2.1	1.5	0.4	0.8	黑曜石	完形	凹面削某
37	09住	被削石片	10.4	6.2	4.5	348.3	砂岩	被削成	スヌードル化物質付着・敲打痕有
38	09住	磨合石器	20.2	5.9	3.8	524.2	船板岩	完形	敲打・研磨有 亂石 右石 研磨面1面
39	09住	石核	11.7	4.7	1.5	90.3	船板岩	完形	圓錐形石核・側面+底面研磨有
40	02底	二次加工有削片	12.3	5.6	2.2	244.2	砂岩	完形	
41	03瀬	打削石片	1.5	1.5	0.2	0.4	黑曜石	折れ	先端部折損 西基盤城
42	03瀬	縫	13.8	5.7	2.9	263.5	砂岩	完形	神狀
43	07土	打削石片	8.7	7.6	2.4	239.7	カルンフェルス	折れ	
44	33土	圓片	11.3	7.5	4.8	603.9	石英	完形	垂凹面削
45	サブトランジオ4	磨合石器	16.1	13.2	5.1	1456.0	砂岩	折れ	敲打・研磨有 台石・底石 番平手彫刻 研磨面2面
46	サブトランジオ6	縫	15.5	5.0	3.3	347.5	砂岩	完形	神狀
47	サブトランジオ2	両面加工石器	6.8	3.4	0.6	12.3	船板岩	完形	底盤石器
48	検出品	砾石	9.6	4.8	3.9	258.5	砂岩	折れ	
49	検出品	圓片	7.6	5.2	4.3	247.6	泥質岩	折れ	
50	検出品	縫	2.3	1.4	0.9	0.6	石英	折れ	
51	検出品	刮片	3.1	5.3	0.5	8.0	船板岩	完形	研磨面or 破面?有
52	検出品	圓片	6.1	7.7	2.2	110.8	カルンフェルス	完形	神狀 研磨面2面
53	調査区南面遺物	砾石	14.3	5.1	2.8	256.4	泥質風化灰	完形	
54	表裏	二次加工有削片	2.8	2.9	0.8	7.7	チャート	折れ	
55	表裏	縫	3.4	1.3	0.5	2.3	黑曜石	完形	
56	表裏	圓片	5.4	4.3	0.6	17.9	砂質貝岩	折れ	
57	表裏	打削石片	5.5	5.3	0.9	26.0	砂質貝岩	折れ	



調査地遠景（西から）



調査開始前（南から）



調査区北西部土層断面（東から）



03 住炭化材出土状況（西から）



03 住壺（13）出土状況（北から）



03 住完掘状況（南から）



03 住 28P 半削状況（東から）



04 住覆土堆積状況（南から）



04 住完掘状況（西から）



04 住カマド内遺物出土状況（西から）



05 住覆土堆積状況（西から）



05 住完掘状況（南から）



07 住遺物出土状況（南から）



07 住完掘状況（西から）



07 住カマド完掘状況（北西から）



09 住遺物出土状況・礫出土状況（西から）



09 住宅掘状況（西から）



17 土半割状況（南東から）



05 溝礫出土状況（南西から）



畠合堆積状況（調査区北東部）



寿小学校 6 年生現場見学



東～南側（東から）



東側（南から）



北側（南から）



03 住出土土器



上 03 住甕 (16)



13 (下半)



01 住出土土器 (1～3) 02 住出土土器 (4～9)



04 住出土土器



05 住出土土器 (29～34) 06 住出土土器 (35・37・38)



07 住出土土器 (40・42～46) 08 住出土土器 (47～49)



09 住出土土器

30 10 住出土土器 (61・67～71) 12 住出土土器 (72・74・76)
05 溝 (82・83・他1)



文字資料 (1)



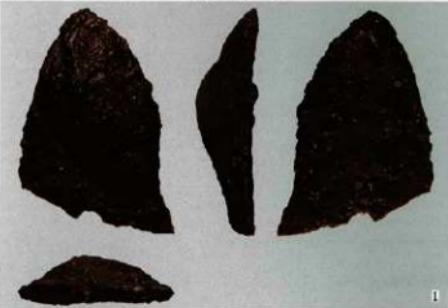
文字資料 (2)



文字資料 (3)



文字資料 (4)



金属製品 (1)



金属製品 (2)



石器・石製品 (1)



石器・石製品 (2)

長野県松本市 北起し遺跡 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし きたおこしいせき はくくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 北起し遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No. 191							
編著者名	森 義直、直井雅尚、関沢 啓、内田陽一郎、横井 奏、三村竜一							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390 - 0874 長野県松本市大手 3 丁目 8 番 13 号 TEL 0263 - 34 - 3000(代) (記録・資料保管: 松本市立考古博物館 〒390 - 0823 松本市中山 3738 - 1 TEL 0263 - 86 - 4710)							
発行年月日	2008(平成 20) 年 3 月 21 日 (平成 19 年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	道路番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
きたおこし 北起し	ながのけんまつもとし 長野県松本市 ことぶきこあか 寺小亦 823 他	20202	515	36 度 10 分 27 秒	137 度 58 分 43 秒	20060414 ~ 20060531	520 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北起し	集落跡	弥生 奈良 平安	住居址 土坑 ビット 溝	12 戸 34 基 15 基 5 基	土師器 須恵器 灰陶陶器 鍍輪陶器 白磁 金属製品(弥生の鉄鏃 1 点を含む) 石器・石製品	新発見の遺跡で、1 回目の調査。弥生時代～平安時代の集落の一部を検出し、土器・石器等良好な遺物を得た。		

松本市文化財調査報告 No. 191

長野県松本市

北起し遺跡

-発掘調査報告書-

発行日 平成 20 年 3 月 21 日

発行 松本市教育委員会 〒390 - 0874 長野県松本市大手 3 丁目 8 番 13 号

印刷 川越印刷株式会社